

令和元年6月4日現在

機関番号：15101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K20752

研究課題名(和文) シャント発声患者のQOL向上を目指した教育プログラム開発

研究課題名(英文) Development of educational program for patients using shunt speech method

研究代表者

三好 雅之 (MIYOSHI, Masayuki)

鳥取大学・医学部・助教

研究者番号：60632966

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、シャント発声を行なっている患者のQOLの維持・向上に繋がる教育プログラムを構築することを目指し、生活上の困難、セルフケアの構造を明らかにし、QOLと生活上の困難およびセルフケアとの関連性を明らかにすることである。
結果として、セルフケアを行なっている患者ほど、Voice Related QOLや、SF-8のQOL得点に影響していることが示唆された。そして、「シャント発声患者の生活上の困難」で明らかとなった結果を考慮し、各セルフケア能力を向上する教育プログラムを作成することが、シャント発声を活用している患者のQOL向上に寄与するものと考えられた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

シャント発声患者のQOLの維持・向上を目指した教育プログラムの構築は、セルフケアへの動機付け、継続を促し、身体・精神疾患の増悪予防に関与するため医療費の削減に貢献する。
失声は離職や社会経済上の問題までを左右し、失声後のQOLに大きく影響を与えることが報告されてきた。言語的コミュニケーションができなくなったということで、社会から切り離されてしまってはならない。シャント術を受けて、発声を再獲得した患者さんが、再び声を用いて社会との関わりをもつことができるようになる。さらに、今まで以上にQOLの高い生活を維持しながら生活することができる。

研究成果の概要(英文)：The objective of this study was to develop an educational program to maintain or improve the quality of life of patients using the tracheal esophageal shunt method for voice restoration. Additionally, the study was conducted to elucidate the difficulties experienced in daily life and the structure of self-care, as well as the relationships between QOL, difficulties experienced in daily life, and self-care.
We found that patients who exhibited a greater self-care agency had higher voice-related QOL and SF-8 QOL scores. Accordingly, establishing an educational program aimed at improving self-care agency, considering the difficulties experienced in daily life faced by patients using tracheal esophageal shunt, may contribute to improving the QOL of these patients.

研究分野：臨床看護学

キーワード：シャント発声 ボイスプロテーゼ 生活上の困難 セルフケア

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

頭頸部進行癌患者では、喉頭全摘出術が行われている。喉頭全摘出後の患者は、永久気管孔で呼吸することになり、声帯も同時に摘出してしまうために発声機能が喪失される。また失声により、しばしば抑うつ、引きこもりなどを生じ、患者のQOL(Quality Of Life)低下に大きな影響を及ぼす。

現在、気管と食道の間にボイスプロテーゼを挿入することで、発声、会話が可能となる気管-食道シャント術を行う方法が確立され、シャント発声を行う患者が増加してきた。

しかしながら、これまでシャント発声患者の詳細なQOL調査はされておらず、患者の日常生活上の困難やそれに対する思い、シャント発声患者が社会の中でどのような経験や体験をしているのか、また、どのようにセルフケアを実施しているのかなど、探求した研究はされていない。そのため、それらの要因がシャント発声患者のQOLの低下や向上に関連があるのか示した研究もみられない。さらに、シャント術後、さらにQOLの高い生活を送ってもらうために、どのような看護介入、教育的支援が必要なのか明らかになっていない現状であった。

2. 研究の目的

前述した背景より、患者のQOLの維持・向上に繋がる教育プログラムを構築することを目指し、シャント発声患者のQOL、生活上の困難、セルフケアの構造を明らかにし、QOLと生活上の困難およびセルフケアとの関連性を明らかにすることが本研究の目的である。

3. 研究の方法

「生活上の困難」、「セルフケアの構造」を明らかにするために、シャント発声を行なっている患者20名に半構造化面接法を用いてデータ収集を行なった。調査内容は、「シャント発声により起きている生活上の困難やその思いに関すること」、「生活上の困難を克服するために自ら実施する健康管理上の行動に関すること」、「自分自身にとって健康とは何か」などを自由に語っていただいた。自然主義的パラダイムに立脚する看護概念創出法を用い逐語録から意味内容を解釈し、コード化を行い、コードの意味内容の類似性、相違性に従い、サブカテゴリー、カテゴリーの形成と命名を繰り返し、上位概念を生成した。

4. 研究成果

(1)「生活上の困難」

シャント発声患者の生活上の困難として、28のサブカテゴリー、14のカテゴリーを抽出した。シャント発声患者は、自分の言葉が聞き取りづらいと感じること等に起因する“コミュニケーションの取りづらさ”や“自分の発声方法を知らない人と話すことは避けたい”“食事の際に不便さを感じる”などの多様な生活上の困難感を抱えていることを明らかにし、医療者における患者理解を深めることへの寄与、看護援助のあり方を示した。

(2)「セルフケアの構造」

シャント発声を活用している人が、QOLを維持するために、自ら実施する生活上の健康管理上の対象方法として、11のカテゴリーを抽出した。その内容は、「乾燥への注意」、「常にブラシを携帯していること」、「ブラッシング方法の工夫」、「痰を出すための工夫」、「入浴の際に気管孔への水が入らない工夫」、「睡眠の際の埃が入らない工夫」、「聞き取ってもらいやすい会話方法の工夫」等であった。

また、本研究において、セルフケアを行なっている患者ほど、Voice Related QOL や、SF-8 の QOL 得点に影響していることが示唆された。そして、「シャント発声患者の生活上の困難」で明らかとなった結果を考慮し、各セルフケア能力を向上する教育プログラムを作成することが、シャント発声を活用している患者の QOL 向上に寄与するものと考えられた。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 6 件)

1. 三好雅之 シャント発声を活用する患者の QOL とその影響要因.
日本気管食道科学会報 査読：有 Vol69, No2, 96p 2018
<https://doi.org/10.2468/jbes.69.96>
2. M.Miyoshi, T.Fukuhara, H. Kataoka, H.Takeuchi
Difficulties in daily life reported using tracheoesophageal speech with voice prosthesis.
Journal of Nursing and Care 査読：有 Vol.6, No4, 2017
DOI:10.4172/2167-1168-C1-062
3. 三好雅之、福原隆宏、片岡英幸、竹内裕美
ボイスプロテーゼを用いた気管食道発声患者の生活上の困難に関する検討
日本外科系連合学会誌 査読：有 42 巻 3 号 574p 2017
4. 福原隆宏、三好雅之、片岡英幸、竹内裕美
QOL 向上を目指した診療科連携手術 頭頸部癌遊離空腸自家移植後の音声再建手術の pitfall と対処法
日本外科系連合学会誌 査読：有 42 巻 3 号 459p 2017
5. 三好雅之、福原隆宏、片岡英幸、竹内裕美
喉頭癌について今あなたに伝えたいこと-最新医療・社会サポート・発声方法の習得-
第 18 回日本言語聴覚学会誌 査読：有 68p 2017
6. 福原隆宏、三好雅之、片岡英幸、竹内裕美
喉頭摘出後の音声再建と永久気管孔の管理
第 18 回日本言語聴覚学会誌 査読：有 124p 2017

〔学会発表〕(計 7 件)

1. 三好雅之、福原隆宏、片岡英幸、竹内裕美
シャント発声を活用する患者の QOL とその影響要因
第 69 回日本気管食道科学会 2018
2. M.Miyoshi, T.Fukuhara, H.Kataoka, H.Takeuchi
Difficulties in daily life reported by patients using tracheoesophageal speech with voice prosthesis.
32nd Euro Nursing and Medicare Summit, France, 2017
3. 三好雅之、福原隆宏、片岡英幸、竹内裕美
ボイスプロテーゼを用いた気管食道発声患者の生活上の困難に関する検討
第 42 回日本外科系連合学会 2017

4. 福原隆宏、三好雅之、片岡英幸、竹内裕美
QOL 向上を目指した診療科連携手術 頭頸部癌遊離空腸自家移植後の音声再建手術の pitfall
と対処法
第 42 回日本外科系連合学会 2017
5. 三好雅之、福原隆宏、片岡英幸、竹内裕美
喉頭癌について今あなたに伝えたいこと-最新医療・社会サポート・発声方法の習得-
第 18 回日本語聴覚学会 2017
6. 福原隆宏、三好雅之、片岡英幸、竹内裕美
喉頭摘出後の音声再建と永久気管孔の管理
第 18 回日本語聴覚学会 2017
7. 福原隆宏、三好雅之、片岡英幸、竹内裕美
シャント発声時努力に対するアプローチ
第 18 回日本語聴覚学会 2017

6 . 研究組織

研究協力者

研究協力者氏名：福原 隆宏

ローマ字氏名：FUKUHARA, takahiro

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。